
お遊び部の神運女子高生

コマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お遊び部の神運女子高生

【Nコード】

N0052K

【作者名】

コマ

【あらすじ】

平瀬ひとみは、特にこれといった特技も無い、運動は苦手で友達作りも苦手という大人しい女の子だった。そんな彼女は、部活をしようと思ったが、何をしたいかわからない。そんな中見つけた怪しすぎる部活「お遊び部」。彼女はそのドアをくぐってしまう。そして超オレ様至上主義の美少女系部長、不動臨と麻雀対決をすることに、そこで彼女のとんでもない才能が開花する。

お遊び部部长と代打ち女子高生（前書き）

麻雀用語とかがポンポン出てますが、麻雀が中心の小説ではないです
お遊びが中心です。

お遊び部部长と代打ち女子高生

春。

私、平瀬ひとみは光里高校に入学した。

この辺では、ランクは中くらい。結構がんばった末の合格発表では嬉しさに姉と抱き合ったりしたのもまだ記憶に新しい。

入学式からまだ3日、慣れない校舎を私は1人で歩いていて。友達といえる友達もあまりいない。いることはいるんだけど、私よりも友達を作るのが上手みたいで、すでに新しい友達と一緒にだ。

まあ、私はちょっと友達作りは苦手だったりする。だから、ちょっと退屈。

別に話しかけたりできないわけじゃないけど、やっぱりなかなか友達、というのは作れない。

今は放課後。

家にまっすぐ帰ってもいいんだけど、ちょっと部活動でも見てみようかな、と思った私は校内を歩き回っている。

ちなみにグラウンドや体育館には用がない、なぜなら私は運動が苦手だから。

中学時代は、体育の持久走ですでに必死、それ以上の運動なんてしてこなかった。

「……お遊び部？」

変な名前だな……

私はその教室の前で立ち止まった。『お遊び部』のプレートがついた部屋は、授業に使う教室よりはちょっと狭いくらいの広さみたいで、中を覗ける窓が存在しない。

手作りにしては妙に完成度が高い、『誰でも歓迎』と書かれた怪しすぎる看板が立てられている。

ほんと、なにこれ？

入ろうか、やめておくべきか、迷っていた。

どう考えても怪しいのだが、お遊び部というものに興味がある。

迷っていると、突然教室のドアが開いた。

まさか、立っているのがばれた！？

「うわあああああ！」

そして教室の中から、なぜかトランクス一枚の男子生徒が飛び出してきた。

……え？　そういう部活……？

ダッシュで私はその場を去ろうとした。だがしかし、それをなぜかトランクス一枚の男子生徒に阻まれる、なんで！？

命の……危機……！

「あ、あの……」

逃げないと……

「助けてくださいいっ！」

「は、はい？」

男子生徒はいきなりその場に座り込み、頭を下げた。

いやいや、こっちが助けてほしい。でもこの人もなにか尋常ではない事情がありそうだ。というか尋常じゃない目にあつた後っばい。

パニックになりかけた私に、教室の中から声が掛けられた。

「あ？ てめえがそいつの代打ちか？」

「へ？ 代打ち……？」

「じゃあさつさと入れ、そんでそのボケ……途中で逃げてんじやねえよ……」

「ひいつ！」

ついに私は、そのドアをくぐってしまった。

お母さん、私、死ぬかもしれません。

教室の中は、異様な状況だった。まず、ごちゃごちゃしている。

あちこちにランプやら、花札やら、チェス盤など、確かに遊ぶに使えそうなものがいっぱいある。

そして教室の真ん中では、1つの机に3人の生徒が向かっていた。

1人は髪が長い、男子の制服を着た……女子だよね？ という感じの美少女？ でも態度がものすごくでかくて、声も質は高いんだけど怖い。

そしてその横に2人。いずれもなぜか上半身は裸で、顔面は蒼白。尋常ではないことが起きようとしているらしい……

「座れ」

「え、でも……」

「座れ。犯すぞ」

ひいっ！ 怖すぎます！

今すぐ帰りたいですが、とにかく座らないとマジで危なそうなので、とにかく机に座ることにした。

「あ、あの……」

「あん？」

「女の子……ですよね？」

プチン、と何かが切れる音がした。

それと同時に、三人の顔面蒼白の男子生徒の顔が、さらに真っ白になる。

まさか、まずいこと言っちゃった……？

「死にたいらしいな……」

「い、いえっ！ そんなことは……ただすっごく可愛らしいお顔を」

「へ、へえ……お前はどうも自分を追い込むのが好きらしいな、マジか？ 調教してほしいのか？」

「ひいっ！ ごめんなさい！」

美少女、改め美少年。というかもうなんでもいい、怖い。

「で？」

「はい？」

「お前麻雀打てるの？」

「あ、いえ……2、3回やったくらいで」

「OK、大丈夫だな」

「ちょっと！？おかしくないですか！？」

「なにも、ただ負けたらこいつらと同じ目にあうぞ」

「わ、私は女子ですよ！？」

「知るか」

「やばい、お怒りだ……」

麻雀なんて、親戚のおっちゃんと少しやったことがあるだけで、ルールも基本的なことしか知らない。

あの時はなぜかおっちゃん泣いていたけど、多分運が良かっただけだし……

うつっ、どうしよう。

考えている間にも、牌は自動で並べられていく。

全自動だ、すごい。だけど今はそのハイテクいりません。

もう、勝とう！決めた。

平瀬ひとみ、ここで勝てなきゃマジで殺される！気合を入れるんだ！

とにかく自分の牌を確認する。

全自動だから、相手がイカサマしてくるってことは無いと思うけど、それで圧勝してるんだから、相当強いということなんだろう。こっちは素人なのに。

牌を並び替える。その動きも、美少年？ に観察されてそう怖い。

私の手は、マンズ1色だ。そして1と2のコーツができている。後は345のシュンツにマンズの3'4'6'8。

……勝てる気がしてきた。

最初のツモは、マンズの8だ。ということとは、6を捨てて、8が頭の……2面待ち。えっと、確か全部同じ色だったらチンイツだったっけ。あとドラ表示牌がマンズの9だから、ドラ3だ。

「よしっ！ リーチ！」

「はあ！？ ダブリー！？」

よし、想定外というリアクションだ。案外勝っちゃうかもしれないなあ。

「ちっ、どうなってんだ？」

美少年は私の顔を睨みながら牌を捨てた。北だ、全然関係ない。他の可哀想な男子高校生もみんな字牌を捨てて、かすりもしない。

そして私のツモが回ってきた。

マンズの5だ。ということは、

「ツモ」

「はあ!？」

「おおっ！ 凄いですよ！」

後ろでトランクス一枚の男子生徒が声を上げた。

うん、お願いだから視界に入ってこないでね。でもこの手はやっぱり凄いみたいだ。

「ダブリー、一発、イーペーコー、チンイツ、ドラ3。えっと裏……乗ってドラ6。ほんと凄いな……」

「ちょっと待て！ なんだそりゃ!？」

「数え役満……俺も初めて見る……」

ジャラジャラと私のほうに点棒が流れてきた。

勝てた！ とにかくめっちゃくちや勝てた、これで少しは大丈夫なはずだ。

牌は回収され、また全自動で並び始める。

そして私の牌、えっと……うわ、全部2つずつだ。確かこれ、チートイツってやつだ。あとは東だけで和了だ。

私の最初のツモ……来た！ チートイツだ！

「ツモ！」

「……は？」

「チートイツ」

「じゃなくてチーホーですね……うわぁ、テンション上がってきた！」

後ろから男子高校生が解説してくれる、チーホーってなんだっけ。

「また役満……」

点棒が私のほうへまた流れてきた。

さつきから凄いな、私。今日はすごく運がいいみたい。今度は私が親だ。

牌を並べ替え、確認する。

白と發が3枚ずつ、中が2枚か。ということは小三元がすでに成立している。

後ろから覗き込んでいる男子学生は、「なんなんだこの麻雀は……」と、ものすごくテンションが高くなってしまっていた。

お願いだから立ち上がらないでね……

「ふう……」

「おや、そろそろあきらめですか」

「いや？ 違っけど？」

美少年はその目を、鋭く尖らせて私をにらみつけた。
背筋に、何か冷たいものを感じて私は一瞬震えた。

「殺しに行く……」

……焦ってはいけない、どんなに怖くても平常心を保たないといけない。

とにかく、いらぬ牌を捨てていこう。まずは西……

「ポン」

前に座っている美少年が鳴いた。しまった、向こうの風だ……

今度は場に南が捨てられる。

「ポン」

また鳴くのは美少年。

回ってこない……

今度は白が捨てられた。カンすべきか、しないべきか。この辺の判断はいまいち分からないな、素人には。

でもおっちゃんは基本的には鳴かないほうが良いって言ってたからやめておこう。

ツモは、東……

風だけど、これ1つしかないし、もう後ちょっとで大三元テンパイだし、捨てちゃおう。

私は東を捨てた。

「ロンッ！」

「はひいっ！」

「ツイーソーシャオスーシー！ ダブル役満！」

「やはり不動さんも強い……神がかり的に」

ここまで勝った分全部取られてしまった、ダブル役満ってなに……？

そつえばあの人不動っていうんだ。

また牌が集められ、つまれていく。

ガラガラと牌が回る音がある中、私のツモのせいで点棒を失っている横の上半身裸の男子生徒2人の顔はどんどん青ざめている。

牌を確認する。

えっと……うーん、いまいちよくないなあ……

「いや、あの……相当の良い手ですよ、これ」

私の気持ちがあったのか、後ろから男子生徒が私に耳打ちする。そう、なのかな。中が2つあって、後はバラバラなようにも見えるんだけど。

「三色同順が狙えますね」

三色同順……？

分からない。とにかく全部そろえるために、ソーズの9から捨てよう。

「なぜそれをつ！？」

あれ、間違えてる？

疑問をちよつと残してしまつたが、麻雀はどんどん進んでいく。とにかく、色をそろえるために牌を捨てまくっている。パチパチとしばらく静かに牌が動く音だけが響いている。

7巡目、私の手牌もだんだんまとまってきた。

中が頭で、残り全部マンズまできた。あとは……

「中切るの！？」

「え？」

「ロン」

「あぁっ！」

不動さんのロン。しまつた……

「小三元トイトイで親つ跳ねだ」

「うう……」

やばいよ、結局点数では不動さんに負けてしまっている。

そして、次の私の手牌は、最初からソーズの3、4、5、6のコーツ。そして待ちは南。と

りあえず第一ツモのマンズの5は捨てる。

「……お前リーチ掛けないのか？」

「え！？」

なんでテンパイだとばれたんだろう。

「ちっ、なんなんだよこいつ……」

不動さんは大きなため息をつく、自分の手牌に目を落とした。そして、しばらく考えた後に捨てたのは、私の待ちの南だ。

「ロンっ」

「ぬあああ！ なんなんだお前は！」

「スーレンコー」

「おかしい！ そんなことが起こってたまるか！」

最後の私の役満で点数はひっくり返った。

また私の大勝。よし、このまま進めば勝てる、生きて帰れるよ……それにしても不動さんは、かなりいらしているみたいだ。まあ私みたいなド素人に負けてるんだから、しょうがないといえましょうがないのかな。

もう、ほんとに。いつ麻雀卓をひっくり返して強硬手段に出るかと思うと冷や汗が止まらないよ。

そして次の私の配牌。

白、發、中のコーツ。つまり大三元、しかも東のコーツもできている。後1つ、頭になるのはマンズの9だ。

「ちつ、また強いんだろ？」

「あ、ツモ」

「なんなんだお前！　ほんとどうなってんの！？」

マンズの9を頭にした、えつとこれは……

そんなときは、後ろのトランクス一枚の男子学生が解説をしてくれる。

「えつと、スーアンコー単騎、大三元、ダブル役満ですね」

「ぜつ、全員……ハコつたじゃねえか……」

この麻雀はどうやら箱下ありというルールらしいので、点棒が無くなっても続く。そして借金分は、身包みを剥がれることとなるみたいだ。

いつの間にか、横の2人もトランクス1枚になっている。なんか、目のやり場に困る。

ついにマイナスに突入してしまった不動さんも、かなりいらつきながら制服のブレザーを脱ぎ捨てた。

「くれてやる！」

「いりませんよ」

「いや、受け取れ！ 奪い返す！」

不動さんは、もう私しか見ていなかった。
怖すぎる……

そして私が親で、この配牌……

「国士無双、天和」

お遊び部のこの教室に、怒号が響き渡った。

美少女研部長とワイルドロー4

「……では、新入部員を歓迎する」

「え？ 誰か入部する人いたんですか？」

「あ？ なに寝ぼけてんだ、てめえだよ。平瀬ひとみだよ」

「え、ええ！？」

新入部員歓迎と書かれた足跡っぽい横断幕が、制服を取り戻した男子生徒たちによって持たれている。

ちなみに制服については、私が大勝ちしたので救済措置として持ち主に返還した。

それで、なぜ私が入部を……

「お前の引きの強さは必要だ」

「で、でも……」

「安心しろ。入部届けなら提出済みだ」

「全く安心できません！」

私の言葉はあまりに無力だった。

学園は社会の縮図だという。私のように、権力の無い人間は、あやつて上の人に無理やり言うことを聞かされるんだ。

私が諦めに入っていると、男子生徒たちはそろそろと退出して行

った。

「あれ、あの人たちはお遊び部じゃないんですか？」

「当たり前だ。俺があんなのを入れるわけが無い。あいつらは確か……エアホッケー部だったか」

「そ、そんな部活が……」

ちよつと楽しそうかも。

「そういえば他の部員はいないんですか？」

「いや、いる。今日は来てないみたいだが」

内心ほつとした。

不動さんと2人きりでやっていく自信は全く無かった。

なんか性格は、ちよつと……ではなくものすごく怖いんだけど、容姿で言えば美少女といつても過言ではないほど、なのに男子。

というか本当にどっちなんだろう……

肩くらいまでの綺麗な髪、それに肌も男子とは思えないほど綺麗な白。

まあ胸は、一応自称男子みたいだから無いけど、もしかしたら控えめなだけかもしれないし。

男子だといわれても、目の前のそれを私が男子だと認められない……

「……なに見てんだ」

「えっ、いや、なんでも」

「そうかよ」

不動さんは立ち上がると、教室の中を歩いていき、かばんの前で立ち止まった。

そして中から、携帯電話を取り出した。

「誰か呼ぶんですか？」

「ああ、そうだ。うちはこういう部活なんだよ」

携帯を操作し、携帯を耳につける。

「おい、美少女研究部」

そんな部活まであるんだ……

「あ？ 俺だ、分かれボケ。

……そうだ、今日は……どうすつか、3人よこせ、ちゃんと勝ったら景品持ってくるから、つかもう居る。

……あー違う。今日入ったバカだ、勝ったらそいつやるよ、メイド服でもスク水でもなんでも着せてやれ、じゃあ今すぐな」

不動さんは携帯をかばんに放り込んだ。

おかしいなあ、足が震えて止まらないよ。今すぐ走ってこの教室から去らないと、何かやばいことになる予感……

「おい景品……じゃなく平瀬」

「いつ！ 今景品って言わなかったですか!？」

「ああ、そうだ」

認めたあー！

この人やばいよ、隠されるのもそれは嫌だけど、そんなストレー
トに酷いこといわれるとは……

「大丈夫だ、勝てば向こうもそれなりに失う。てめえはそれを丸
ごと受け取るだけだ。まあ少しは部に回すかな」

「そこじゃないです！ 私が言ってるのは、私が負けたときのこ
とで……」

「あー」

「あー、じゃないですよ！ こっちの都合も考えて……」

「だって負けるとかありえねえだろ」

当然のように、なんて無責任な。

思わずため息が漏れる。

廊下を誰かが歩く音が聞こえる。

パタパタとどんどん近づいてくる。 ああ、来た……

心臓はものすごく速くなっている、どうしよう。 まあ学生なんだ
し、負けたってそんな無茶は……

やりかねない気がしてきた。

「きつ、来たでござるよ！」

露骨にオタクっぽいのがやってきた。

黒ぶちめがね、ぼさぼさの髪、ぽっちゃり体系。そしてなんか息が荒い……

なぜか学校内なのに、ジーンズの上にTシャツ。そしてシャツにはなんか美少女のイラストが書かれている。

そしてその露骨なオタクの後ろには、大人しそうなクラスの男子A・Bみたいな普通の男子生徒が2人ついていた。

「おー、来たか。まあ突っ立ってろ」

客を全くもてなさない不動さん。

うーん、同じ男子でもこうも違うんだなあ……

「ま、まさかこの子が今日の……！」

「そうだ、勝ったら約束どおり、バニー服でもウエディングドレスでも着せてやれ」

「最後のはダメえ！ ていうか全部嫌ですよー！」

私の抗議は全く聞いてくれない……

「だがてめえらも、負けたらちゃんと負け分払ってもらうぞ？」

「当然！ 今日は我が部の超お宝ですよー！」

露骨にオタクっぽい人が言うと、後ろの男子生徒2人が、教室の外から何かを抱えて入ってきた。

マネキン、だろうか。

「ミクさんの等身大フィギュアですぞ！」

不動さんが舌打ちし、「いらねえよ……」と呟いたのは多分私にしか確認できていないはず。私も同感です、でも不動さんはしきりに換金すれば、とぶつぶつ何かを考えている。

「……まあ、いいだろう。それで勝負だが……」

不動さんは、立ち上がり教室内のごちゃごちゃの中から、四角いケースを取り出してきた。プラスチックのケースだ。

「UNOというカードゲームだ」

「そ、そんなもので私の命運が……」

「そうは言うが、これは奥が深いゲームだ」

不動さんはカードを慣れた手つきで配っていく。

UNOは1人7枚の手札を持ってスタートする。そしてカードの種類は大きく分けてまず赤、青、黄、緑の4色に分けられ、さらに色ごとに数字のカードと、ドロー2、スキップ、リバースの記号カードが存在する。

そしてそれ以外の例外カード。ワイルドカードと呼ばれて、いつでも出せて、色を自由に指定できる。さらにそのワイルドカードと同じ効果に加えて4枚のカードをドローさせる、ドロー4というカードがある。しかしドロー4は、他に出せるカードがあればそちらを優先しなくてはならない。

まあドロー4を持っていればそこそこいい手といえるかもしれない

い。

そして私の手札。

ドロー4が3枚、緑のスキップが2枚、赤と青で3が2枚。
周り順は……

「俺からスタートで、部長、平瀬、A、Bの順な」

「俺はA（B）ですか!？」

思わず、私は吹き出しそうだった。

「ドロー4」

いきなりドロー4……でもそんなことしたら……

「チャ、チャレンジッ!」

チャレンジとは、ドロー4は他に出せるカードがあれば使ってはならない、というルールを破っていると思えば、その次の順番の人が使える権限。

この場合だと部長が不動さんの手札を確認し、実際にルール違反なら不動さんにペナルティ、でも、

「なっ、ふ、不覚……」

ルール違反ではなかった場合は、チャレンジを使った人がペナルティ。ドロー4の4枚に加え、追加で2枚引くことになる。

「色は赤だ」

「くっ……！」

赤は手札に無かつたらしく、部長はさらにカードを引いた。

次は私の番だ、とりあえず赤の3を出す。

A、Bはそれぞれ数字のカードを出し、黄色の7で不動さんに回る。

「ドロー2」

そして部長も、

「ドロー2！」

私は、この場合は絶対にチャレンジされないから、ドロー4を1枚出す。

色指定だから……

「緑で」

「ドロー2」

「ドロー2」

「ドロー2」

とんとんと、ドロー2が出されていく。そして部長は、唸りながら、合計14枚のカードを引いた。

そして部長は緑の2を出した。

「スキップ2枚」

私は手の中の緑のスキップを2枚出す。

「飛ばされた!」

A、Bが全く同じリアクションを取っているときに、不動さんもスキップを1枚出した。

「ぬおっ!」

ということは、また私だ。

えっと、青の3は出せないから、ドロー4を1枚。

「青」

「くっ」

Aは4枚のカードを引いた。そして青の5、赤の5、緑の5の3枚を出す。

そしてBは緑の7。

その直後に間髪入れずに、不動さんはドロー4を出した。

「まっまた!」

「青だ、さっさと出せ」

「なんて引き……」

部長は黄色の9を出す。それなら次の私は。

「ドロー4、ウノ」

「またかよ！」

Aは4枚のカードを引く。

……あれ？ ドロー4って4枚しかないはず。なのに5回出たよ
うな……

Aはカードを引いた後、ドロー2を出した。

そしてBもドロー2、色は青。不動さんはドロー2で返す……の
ではなく、カードを4枚引いた。そして青のスキップを出す。
と、いうことは。

「上がりっ！」

良かった……

なんとか、自分の体を守ることができた。

「くっそおおおおおお！」

部長はその場に崩れ落ち、床を叩いた。

目からは涙がぼろぼろと零れ落ち、床を濡らす。木でできた床は、
すぐにその涙を吸い込んでしまう。

A、Bも、崩れ落ちてはいないが、その場で体を震わせ、涙を流
している。

……あのフィギュア、凄く、大切なものだったのかな……

「スク水……バニー……ブルマアアアア！」

「同情の余地も無いよ！」

「ううつ、メイド、服……」

悔しがり方が爽やかじゃない……
不純だ、不純極まりない。

「おいおい、敗者は失せろよ。この無駄にごついマネキンを買ったから」

「ミクたん……ごめんよ、また会いに来るでござるから……」

「は？ 即行売却に決まってるだろうが」

「『バカな！？』」

3人が立ち上がり、不動さんを睨む。

「あなたは、愛する人を売るといいますか！？」

「うつせーよ、ちょっと綺麗っぽいセリフ使ってるじゃねえ。てめえらは愛する女をギャンブルに使ったんだぞ？」

「ぐつ！ ……そうだ、確かに我等が間違っていた……」

3人はとんでもないことを言った。

「「仕方ない……こっちは3人、強硬手段に出る！」」

「なに言ってるんですか!？」

「ほう……来いよ」

「ええ!？」

言っではなんなんだけど、不動さんは体の線は女の子みたいに細いし、どう見ても腕力があるほうには見えない。

それに相手は平均的な男子高校生A、Bに、ガタイはぽっちゃりながらガッチリだと思われる部長。なんか、この凶柄嫌だ……

しかし事は、私の予想とは全く別のほうに進んだ。

「ぐはっ！」

「うわっ！」

「うわっ！」

一瞬にして、部長とA、Bは吹き飛び、教室の扉の近くまで飛んでいった。

「……え？」

私は言葉が出なかった。

何が起こったのかは全く分からない、ただ不動さんに詰め寄った

3人が一瞬にしてあそこまで吹き飛んだのだ。

「さて、強硬手段だな……？」

「「「ひいつ！」「」」

ここからは不動さんの後姿しか見えない、でも……
どんな顔をしているのか、なんだか想像がつく。

「二度と笑えなくしてやる……」

「「「ひいやああ！」「」」

一目散に逃げ出した3人を追って、不動さんが教室を飛び出して
いった。

……私、どうしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0052k/>

お遊び部の神運女子高生

2010年10月13日14時33分発行